

他各種の會則及び數十篇の會歌、寮歌、應援歌等約一百頁の附録が付て居る。

之を要するに、本書は、一橋五十周年を紀念するに、極めて相應しい、生命に充溢したる、堂々たる、學校生活史であり、發展史である。其骨髓たる一橋精神を完全に體得したる者でなかつたならば、なか／＼是れ丈けのものかとても出来るものではない。此點について私は深く編纂委員諸君に敬意を表さなければならぬ。又た其の體裁と云ひ、文章と云ひ、殆ど申分がない。否寧ろ嘆賞するに足るものである。只だ然し、吾人の見る所を以てすれば、卷頭の字寫の中に、故村瀨春雄其

人を加へたかつたことと、史料の提供をもつと廣く中央地方の別なく、適當な方面の人に求めたならば、更に一層間然する所の無いものが出來たであらうにと思ふのである。

最後に私は、滿天下の學生、其父兄、教師、學校管理者、文政關係者を始め、政治家、操觚者及び各方面の指導者に切に此の書を讀まれんことを勸めて已まぬものである。

一橋黌五十年の生活は、克く此書を生んだ、商大を始め、廣く天下の學校生活は、此書の讀まれることによつて、必ずや貴重なる何者かを付け加ふる所があらうことを、吾人は斷言して此筆を擱くものである。

株式
會社 京都取引所譯 紐育株式取引所

研究館編纂室

株式組織の企業勃興し、株式放資が年を逐うて盛なるに及び株式取引所が財界樞要の公

共機關として益々重要視せらるゝに至るは、自然の順序である。されば株式取引所に於け

る賣買數量なるものは、一面「リーフマン」氏の所謂證券資本主義的經濟組織の發達程度を示し、他面國民の經濟的自覺の實狀を物語れるものであると云へよう。

近時我國の株式市場も、財界膨脹と共に異常の進展を遂げ、之を利用せんとする者の年々歳々増加せるは、顯著なる事實である。此事は、取引所が一般經濟と特に緊密の關係に立てるものなるを直示せるものであつて、苟も現代經濟の機微に通じ、其眞諦を會得せんとする者は、取引所に關する或程度の理解を要することを指摘せるものである。然るに、由來取引所制度程其組織の複雑に、又取引の難解難入なるものは、他に多く其類を見ない其實狀に至りては、局外者の殆んど窺知するを許さざるものがある。然るに拘らず、之に關する文獻にして見る可きものは頗る寥々、かの證券市場の研究が意外に閑却せらるゝは時代の進運に伴はざる奇現象として、遺憾至極の事と謂はねばならぬ。此時に當り、本書

の上梓は、此缺陷を補ふ一助ともなりて誠に時宜に適せる企圖と信ずる。

本書の譯述者たる今村眞二氏は、我校友にして、在校中夙に意を取引所研究に用ひ、現に京都取引所の繁務を執掌せる傍ら、尙之が研鑽を重ねて倦まず、洵に眞摯なる學究として推稱措かざる士である。本書は紙數百八十頁、輕快なる装幀の内に部門を分ちて、

一、紐育株式取引所定款

二、定款に基き理事委員會により採用される規定

三、「ブラット」氏の紐育株式取引所解説の三項を載せてある。

「ブラット」氏は、「ウォール、ストリート」誌記者として又紐育商業會議所祕書役として令名あり、其著「ザ、ワーク、オブ、ウォールストリート」の名著なるは、今更喋々する迄もない事であるが、本書は全篇三十一章より成る同書の中、其第九章乃至第十一章及第十五章、即ち(一)證券の登録(二)紐育株式取引所

(三) 紐育株式取引所所屬清算所(四) 取引員及其營業所の部を特に選定抄譯したもので、世界最大證券市場の組織と機能とに就き其梗概を示し、之により、第一、二に掲げらるゝ最近所定の同取引所定款及規定を解するの便に供したるは、其用意の極めて周到なるを思はしむる。加ふるに筆路流暢、章句を逐うて丁寧文義を明にし、毫も澁滞の痕も止めざるは、更に一段の光彩を添ふるものがある。

此書量に於ては必ずしも大ならざるも其關する所は深且廣なりと云ひ得る。惟ふに歐米先進國に於ては、實務に關する好著述は、屢々實際家の手によりて爲さるゝ。此意味に於て、同氏の身親しく實際に就いて尙特別の研究を遂げ、學理と實際との調和を圖るに一意専念たるは、學界並に實際界のともに推重すべきところで、本書は實に此兩者の爲めに、好個の參考資料を提供するものと謂はねばならぬ。こゝに同氏の近業に接して愉悅に堪へず、數言を記し以て紹介の辭に代へたいと思ふ。(青地)

東京稅務
監督局屬 織田吉藏述

研究館編纂室

「複記式簿記講義要綱」

著者は本校第十四回卒業生にして親しく稅務にたづさわれる人である。従つて本書はこの方面より複記式簿記の説明をなすことに特に力を入れてある様に思れる。『齊しく直稅と限らず間稅と謂はず經理庶務と謂はず一般稅務の執行上會計整理の方法たる簿記の知識を備へて置くことは極めて必要であるが今日の稅務に於て最も簿記の知識を必要とするものは直稅事務中所得稅及營業稅調查事務である。蓋し之等稅目の課稅標準たるものは先づ一應納稅者の計算に俟つものであり而も概ね簿記の方法を経て計算せられてゐるものであるからその金額の當否を觀察するには必然その計算方法たる簿記上の手續を述に辿つて調査せねばならぬからである。それで以下本講に於て記帳整理の原理及損益金の計算に關する概念の研究をなすにあたりても本來本講義の設定が右の必要に基づいて居るからその内容に於ても記する簿記の知識よりも觀る簿記

の知識の習得を主眼とするものである』とは本書中の一文である。然し、本書は所謂出版物として發行せられたものではない。講義要領として謄寫せられたものである。私はかゝる簿記書の日も早く出版せられんことを希ふものである。

西谷健太郎著『簡易なる會計及帳簿』

本書は簿記學を知らざる人にもすぐ間に合ふ様、やさしく新式な帳簿の附け方、決算の仕方等を説明したもので、専ら小規模の會計に利用することを目的として説述せられたる至極、實地向きの便利な書物である。著者は本校第十三回の卒業生西谷君で、潤達敏腕なる少壯有爲の會計士であるから、其の學問上の素養と職掌上の經驗とを經緯として、克く其の要領を捉へて、明快に説述せられてある。先づ商人は是非相當の帳簿を備付け、整然且つ明瞭に、其の營業の收支を記載して置かねばならぬ必要から説き起し、而して其の記帳法には必ずしも、簿記學の素養がなくとも出来る様に、複式と單式とを巧に利用して説明せんことを方針として、之に必要な簡易なる帳簿の組織、其の雛形、を示し且つ

各帳簿の性質及記入方法の説明をなし、次に日々の取引の記帳方法及順序を例示し、然る後に、之を元帳へ轉記する手續や心得、借方貸方、相手勘定の説明に入り、更に決算の仕方及決算書類の作成方法を解説し、次で工場會計、合資會社、合名會社の會計、を大體簡明に説明し、最後に營業稅、所得稅等の賦課に當り、記帳の不備不注意等より或は疑惑を受けたり、過當の負擔を蒙りたりする様な實際的の諸場合を擧げて親切に、注意、指導、警戒を與へて居るものである。約百五十頁の小冊子ではあるが、實際的の價値は決して小ではない。正規なる商業教育を受けないで、實地事業に従事して居る多數の小規模營業の會計方にとりて、頗る有益なる師友であると思ふ。只著書の記述、體裁等から謂へば少し平易に書き、且つ振假名付にでもして、記帳の順序説明をも少し詳細にせられたら、尙ほよかつたろうと思ふ。(研究館編纂室)

神戸市下山手通七丁目九二 現在(神戸市平野楠谷町一一五) 西谷健太郎著作兼發行定價金貳圓